
一部50円です



人恋しさ

黒澤明監督の「デルス・ウザーラ」という映画を観た時の感激を忘れられない。ロシアと中国の国境を流れるウスリー川流域に広がる原生林のなかで独り生きる猟師デルスと軍人で地誌調査官アルセーニエフの出会いと友情を描いた映画だ。果てしない未開の原生林を生活の場として生きている現地人のデルスは、素朴、純朴というような言葉では形容出来ない優しさを持っていた。私がさがし求めていたのはこのやさしさであると

映画を観た瞬間に悟った。

山岳部の夏山合宿が終了し一人河原でテントを張り約束した友を待っていた時、言われぬ心細さを感じた事があった。単独行の経験がなかった為か、誰とも話さず山中で幾日も過すと不思議に人と話したくなった。山の中であるから人に会うことも少ない。たまにすれちがう人があるとちょっと声をかけたくなる。こんな時の気持ちは孤独とは違う人恋しさである。

山男の間で「涸沢美人、徳沢美人…」などと揶揄したものだ。確かに山中で出会う女の人は美人に見える。1週間も人に会わずにいると無性に人に会いたくなる。男でもいいから誰かと話をしたくなる。女の人であればさらにいいのであろう。これは男だけでなく女の人も同じように思うようだ。私が見知らぬ女の人から手紙をもらったのも山の中での出会いであった。ひとり食べるテントの飯に飽きて山小屋の飯が恋しくなってテントから抜け出して夕飯を食べに行き、久しぶりの美味しい食事をガッツついて食べた。その姿を見ていた女の人がどう言うわけか感心し手紙をくれた。

数日間ひと気のない場にいるだけでもスグに人恋しくなり普段なら思いもしないような気分になる。これがシベリヤの密林であればどうだろうか。虎に対しても畏敬の念を抱くように、人のかわりに森林の木や生きもの全てに親しみを持つようになるのだろう。

デルスが晩年、猟師の命である視力が衰えアルセーニエフの友情で彼の住む街で暮らし始めたが街の生活に馴染めずすぐに不慮の事故死を迎えるが、デルスの死で更に生き生きと彼の森での生活がよみがえってくるように思えた。

何故か山深い地でめぐり会うと同じ人間でも素朴で純情な感じを受け感傷的になりやすいものだ。

笑っている女性はよく見かけるが、男でいつも笑っている人は少ない。特に爺さんではさらに少ない。生前の祖父の笑顔などはほとんど見たことがなかった。それに対して、母方の祖母などは笑顔を絶やしたことがないくらい常に笑みを浮かべて話をしていた。

男がよく笑うのは酒を飲んだ時ぐらいだろうか。「男のクセにニヤニヤするものじゃない。しまりのない顔をしていたら笑われる」こんな言葉を幾度か聞いた覚えがある。仕事場でも緊張して、家に帰ってもリラックス出来ずに歳をとった為に男性陣から笑顔が遠のいたのだろう。

落語家の桂枝雀が生前「緊張の緩和理論」を言っていた。笑いは緩和した時に起きる。精神が緊張から緩和する際に起きるのが笑いで、大きな緩和は悟りの境地で、次にあるのが日々の生活の中の喜びの笑い。落語などの笑いはその次の瞬間的なものであると言う。

色々なしがらみから心を解き放つのはむずかしい。一杯引つけて小さな瞬間的な笑いを繰り返せば大きな笑いの世界が開けるかも知れないが、やはり酒を飲んでも家族の者達から嫌な顔をされたりせずにすむ爺捨て山でしか実現出来ないのだろう。

ヒマラヤへの道2

梵店主

立ちふさがっていた。
ある日、よっちゃんは思い切って支店長室のドアを叩いた。

「どうしたんや。しもちゃん」と店長は尋ねた。

「実は、会社を辞めてヒマラヤへ行こうと思っっています」と答えた。

「へえ、休暇を取って行ったらええ。辞めることは認められん」。店長は穏やかな口調である。

「いえ、準備からしますので半年ぐらいはかかりません。辞めさせてください」。よっちゃんは、冷や汗をかきながら店長にお願いした。

店長は子供をあやすように

「しもちゃん、少し考えたらええ」と言っただけで話が終わりになった。よっちゃんは店長室を出て席に戻ったが、興奮した気持ちを抑えることは出来なかった。店長に辞意を言う前と言った後とは、店内の様子がまるで違って見えた。忙しく立ち回る社員達が急に何かよそよそしくなったように感じられた。自分の気持ちが変わっただけなのだが、一瞬にして世界が変わったとよっちゃんは思った。

午後の株式市場が三時に終わり、顧客との連絡をしていると、営業課長が来て、

「しもちゃん、仕事はエエから俺に付き合え」と言う。

まだ五時前だ。いつも九時近くまで営業をしているので変だと思ったが、店長からの指示の為だと理解した。課長は店を出て近くの居酒屋に入り、よっちゃんに好きなものを注文したらと勧めてくれた。

この課長はでっぷりした体格で、好感が持てる人だった。よっちゃんには好きであった。

長崎の出身である課長は「ヒマラヤに行きたければ、休暇を取って行けばいい。考え直したら」と言いながら酒を注いでくれた。

よっちゃんの心は決まっているのだから何を言われても聞く気はない。黙って聞いていて反論もせず食べて飲んで。課長には悪いが聞くわけにはいかない。

次の日も次の日も毎日、上司の誰かがよっちゃんを誘って飲み食いに連れて行き辞表を撤回するように迫った。なかなか辞めさせてはくれない。とうとう一回りしそうになった時、よっちゃんは店長室に呼ばれた。

部屋に入ると店長は開口一番、「どうや、思いなおしたか」と聞かれた。

「辞めさしてください」。よっちゃんは迷いなく言った。

店長は、穏やかな表情で「ヒマラヤへ行くのに一ヶ月の休暇をやる。

無事帰ったら君の希望する支店か関連会社へ行かしてやる。それで、どうや。アメリカでも総合研究所でもどこでも行きたいところへ行かしてやる。だから辞めるな」。

長い沈黙が続いた後、店長が「気持ちは変わらないか」と語気を強めた。

よっちゃんは「はい、変わりません」と答えた。

「そうか、仕方がないなあ。君の親爺さんに電話するがいいか」

「はい。かまいません。してください」。店長は受話器を取り上げて田舎の親爺に電話した。店長はしばらく話して電話を切った。

店長は上気した面持ちで言った。

「親爺さん、泣いていたぞ。息子がしたいようにさせてやってください」と言われた」。



ヒマラヤが惹きつける魅力とは…

上原むつえ

千葉の祈祷師は、私を家に招きいれてくれた。

高知の寺の修復について私は聞いた。「私が手をつけてもよいか。つけるとすればどんな方法があるのか」

祈祷師は、真つ赤に燃えている練炭の九つの穴に火箸を突っ込んで占って「人智無量」

と大きな声で私に言った。やれば道は開ける、という意味に私は解釈した。

その祈祷師の言葉を信じて高知南国の寺の修復をやる決心をしたのである。

寺の檀家が少なくても、檀家総代をはじめ寺役の人々の了解と協力をお願いしなければならぬ。

大工をはじめ毎日五十人の人達が作業にあたった。その中には多くのボランティアの人達もいた。

私は、その人達の為に食事の用意を毎日した。美味しく食べてもらうために味付けや食材には気をつけた。

何より苦労したのは大工に払う金であった。毎月毎月払う金は大変な額であった。この金を用意する為に大変な苦労をした。檀家からの援助を期待できない以上、自分で都合つけなければいけな

った。身延山からの金銭の援助は何もない。

まず、最初に行なったのは托鉢である。朝から夕方まで京都の四条大橋の

たもとに立って、『法華経』巻第六の「如来寿命品」を唱えつづけた。一日立ち

尽くすと、およそ四万円程の浄財が集まった。ほとんどは硬貨なのでたい

へん重く、背負い袋に移してようやく運べるほどであった。

「如来寿命品」は約四分で唱えることができるので、一日約四百回ぐらい唱えることになる。

京都の久成院に私の先輩がいたのでそこに泊めてもらい、毎日四条大橋に通ったのである。一カ月に二十日ほど、

雨降りや用事のある時以外は立ち続けた。十六年間でおよそ一億円の浄財が托鉢で集まった。

時には福井にも足をのびし、托鉢をした。門徒の多い地域では、多くのお金が集まった。

寺の建築はたいへんお金がかかる。最高の材木を集め、最高の大工に仕事を依頼し、数百年もつような建物にしなければならぬ。民家のような一般建築とは比べものにならない費用がかかるのである。

寺の修復をやる決心はしたものの、金はなかった。少ない檀家からの寄付ではどうしようもなかったのである。

かかる費用については、すべて私が責任を負わなければならなかった。お金の工面にたいへん苦労した。

托鉢で集めた浄財だけでは間に合わない。実家の兄に幾度もお願いに行き、用立ててもらった。兄はたいへん理解のある人で、多額の寄付をその都度してく

れた。

実家は広大な茶畑を所有し、製茶業を営んでいた。父は跡継ぎの兄に、茶畑で

採れる一番いい茶の収益は私に渡すように言ってくれていた。静岡は茶の名産で、その値もはる。その中で最も優れた

茶を売った利得は、私におくるように兄に言いつけていたのである。その金額は莫大であった。そのすべてを寺の建築のためにそそぎ、完成をみるのである。

父は婿養子として母と結婚した。近在の農家の出である。

私の実家のある大淵村は富士山の火

山灰と火山岩で出来た地盤である為に水利が悪くて困っていた。そんな村人の願いをかなえる為に、父は大きな井戸を掘る事を決意する。掘削する費用がなかった。いまのお金に換算すると数十億かかるとみられたが、銀行に融資を申し込んでも相手にされなかった。

跡継ぎである母に頼んだところ「時勢が変われば家の財産はどうなるかわからない。皆さんが喜んでくださる事ならやってください。私が銀行に頼みます」

と母は父に答えた。そうして井戸堀が始まった。

しかし、毎日多くの人達で掘り続けたも水は出てこなかった。年々銀行からの借金が増えつづけて数年が経った。村の人達もこれ以上掘削費用がかさめば私の家もつぶれるだろうと思っ

たらしい。五年も掘りつづけて二十五億円を使っても水が出なかった。母も病死して家もどうなるか分からぬようになった時に水が出た。大きな水脈を掘り当てた。

この井戸の水利権が家の大きな収入になった。この収入からも多くの金額を寺に寄付してもらった。

実家からの多額の援助が私にとって大きな助けであった。



富士山麓に広がる茶畑

最終回 アメリカ旅行

平成二十一年も師走を迎えました。日ごと時の経つのが早く感じられ、はや年の瀬です。でも昔ほど、年の終わりを感慨深く迎えることは少なくなりました。

私が「芥川だより」に連載を始めたのは平成十八年十二月号ですから、ちょうど三年になります。今月号でこの連載をしめくろうということもあって、今年の暮れは少しばかり感慨深く迎えられるそうです。

拙い文章ながらも、三年間毎月欠かさず書きつづることができたのは、読者の皆さまのお励ましとご支援にささえられたゆえです。この三年を振り返ると、毎月毎月書きつづけるという苦労もありましたが、これまで生きてきた私の半生を改めてふりかえるという貴重な歳月でもあったのです。できるならもう一度あのときにかえりたいと思うような楽しい思い出に笑みがこぼれることもあれば、悲しくつらい出来事に思わず涙があふれるということもありました。

自分史を書くなど、「芥川だより」のご縁がなければ、思いもよらないことでした。はじめは、書いてもせいぜい一年ぐらいと思っていました。が、三年

もつづいたのは、みなさんのご声援はもちろんのこと、私の中にいろいろな思い出が次々とわきでてきたことあるのです。そんな思い出を言葉にするということも、はじめての経験ですから、また一苦労です。毎月原稿締め切り日に近づく、せかさされるように拙い文を書いてお送りさせていただいたものです。それも、いまとなつてはいい思い出になりました。

嬉しいことに、この連載を一冊の本にしていただけたことになったので、本タイトルは私の思い出深い花、「百目紅（さるすべり）」にしました。今年中には仕上がる予定です。機会があれば、お手にとつて、話題の一つにでもしていただければ、幸いに存じます。

さて、最終回はアメリカ旅行です。今回も、忙しさに追われ、原稿締め切り日間の原稿書きです。多忙な毎日に変化の連続ですが、思い出は少しも変わりません。アメリカへ行ったのはいつ頃だっただろうと、記録を見ましたら、昭和五十六（一九八一）年七月四日出発とありました。二週間ほどの日程でしたが、たいへん大がかりな旅行だったのです。毎月積み立てて、どうにか旅費を捻出したものです。ご一緒させていただいた方々は、ほとんど鬼籍に入りました。

まずカナダへ飛びます。カナダは日本のように森が豊かで、住みやすいだろうと思いましたが。景色もとても気に入って、こんな緑に囲まれたところなら住んでもいいなというのが第一印象です。森に住む小動物はおとなしく、人になりたいへんなれているのには驚きました。もう一度行ってみたい国の一つです。いまの自分の年令を考えると、むずかしいかもしれませんが、チャンスがあれば行ってみようという勇氣はあるつもりです。とはいって見たものの、歳には勝てませんでしょうか。

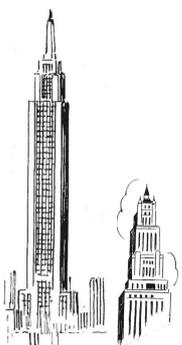
カナダとアメリカの国境にあるナイヤガラの滝の迫力は、凄まじい一言に尽きます。滝の音が地響きとなって身体を震わします。滝の傍まで行けるように遊覧船が出ています。船に乗った私たちは、雨のように降りそそぐしぶきに驚いて、カッパを大急ぎで着用しました。凄い轟音としぶきのなか、

滝口近くまで船が進みます。すばらしい滝です。轟然と響きわたる滝の音響に送られて、ほんの暫くでしたが、遊覧して、休息所の方へ引き上げました。飛行機に乗って空から滝を望む遊覧もあるというので、私は、こんなチャンスはなかなかないと思い、手をあげました。申し出たのは私一人。「あら私だけ？ 寂しいわね」といいましたら、「私も行きましょう」といつてくれた方があって、さっそく飛行場へ走って行き、二人で双発機に乗り込みました。二十分ほどのフライトでしたが、上空から見たナイヤガラの滝もまた迫力満点で、忘れられない思い出になりました。

ナイヤガラの滝を見物した後、ワシントンへ自動車で入ります。広漠たる山野を走ります。外は夜でも見えませんでしたが、明るい車内では汽車の旅を楽しみました。



壮大なナイアガラの瀑布



ワシントンではアメリカ初代大統領にお逢いし、早々にニューヨークへ入ります。自由の女神に敬意を表わし、女神像からアメリカ東海岸を望みました。摩天楼といわれるニューヨークのビル街、数十階という高層のビルが林立している街並みは殺風景でした。カナダの緑豊かなところとは対照的で、とても住みたいとは思いませんでした。

東海岸より西海岸へ飛行機で飛び西海岸のカニ料理屋さんに連れて行ってもらいました。美味しい見事なカニを御馳走になり忘れられない思い出です。

アメリカの回遊は六日間ほど、次はハワイ島へ飛びます。ハワイには日本人が多く住み、お念仏のご同朋もたくさんおられます。本願寺のハワイ別院へ皆で参詣しました。他の宗派のお寺もあるのですが、やはり一番親しみやすい感じがしました。

ハワイには日本の方がどこにでも見受けられ、買い物もしやすく、毎日あちらこちらの島へ案内をしていただきました。とりわけハワイ島には馴染み易くさせて頂き、楽しく島の風物に接することができました。ほかの島々にも、時間をかけてゆっくり巡りました。二週間の旅を終えて、夜の最終便で日本に帰ります。夜中のうちに太平洋

上空を飛び、ちようど夜が明けはじめるころ、日本にいたります。富士山のすばらしい朝焼けの光景を眼下に見おろすことができました。じつと富士の姿を見つめ、視界から消えるまで目が離せませんでした。

成田空港に到着し、無事に旅行を終えます。このアメリカ旅行でもまた、たくさんの楽しい思い出をもちかえることができました。

最終回にふさわしい内容ではなかったかもしれませんが、三年間連載をつづけてきた私にとつて、最終回を迎えるというのは感慨深いものです。連載を終えるにあたって、改めて読者の方々のご声援に深く感謝申しあげます。

それではそろそろ、筆を置かせていただくことにします。長い間ほんとうにありがとうございました。

* * *



『百日紅』尾崎良子著
来年一月発刊予定です

「下の世話」

介護で大変なのは下の世話である。

特に母は元来が便秘体質だった。加えて加齢で、腹筋が弱くなっているの、なかなか便が出なかった。一週間ぐらいの宿便はザラだった。そうになると、腹が張って腹痛になる。

ある時、トイレから、母がなかなか出てこないの、見に行つた。

「どうしたん？」

「ウンコが出ませんのや」

「いってお尻に指を突っ込んで出そうとしていた。」

「あゝあ、そんなことしたら、汚いな」

と叱つて、ウエットティッシュで母の指を拭いて綺麗にした。

「分かった。そしたら、僕が出したるわ」

「いってゴム手袋をして母の肛門に指を突っ込んで出すことにした。」

驚いた。便は岩のようだった。こんなに硬くなるものなのかと初めて知つた。

それから一時間、悪戦苦闘した。ウオッシュレットのお湯で便を柔らかくしながら、なんとか排便できた。

「良かった、良かった」
ただ排便をする、人間として当たり

前の事が、こんなに嬉しいものだ、と初めて知つた。

それからは母が便秘にならないように、食事で食物繊維を採るよう心掛けた。

その後、老人ホームに入居してから便秘薬を処方して貰っていた。

しかし、これが結局、命取りになった。便がいつも液状なので、大腸菌が尿道から入り、感染症を起こしたのだ。人間は体力がないと大腸菌でも死ぬ。地球上で最強の生物は、細菌だ。人類は驕つてはならない。(龍)

俳句

養女

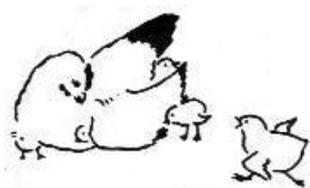
○ 口答えなき夜の一人霜柱

○ 蛸焼きを届けし少女頬紅く

○ 隣席に咳込む人やすぐマスク

○ 着ぶくれて未明に祈る流星群

○ 瓦礫よけ水仙の茎生き生きと



「ふたりの思い出」

明石幸次郎

早いもので今年も師走の季節となりました。この時期になると、喪中はがきが毎年何枚か来ますが、歳を重ねると共にこの数も多くなりますが、その中味は、大抵の場合は本人又は伴侶の両親かたまには祖父母が亡くなったとの通知で、亡くなられた方も大抵が80歳近くか、90歳以上も多く、中には新入社員当時の上司であったMさんから貰った喪中はがきには、103歳で父親が亡くなくなられたとのことで、今年春に会ったこの上司からは、この数年は父親の痴呆が進み介護も大変で、昔であれば70歳を超えた俺が子供に介護して貰えたのだがなあーと冗談を言って笑っておられたので、ご本人は大往生された父親を看取られ、正直やれやれではないのかなあと思いました。反対にショックであったのは、去年8月に甲子園に巨人戦と一緒に観戦し、残念な思いを共有した工場勤務時代のU先輩が、今年8月に67歳で亡くなったとの奥さんからの喪中はがきです。

この二人には、サラリーマンとしての行き様、仕事に対する姿勢など影響を受けて、サラリーマン人生の節目で相談に乗って貰ったり、心配をかけた

りでその後、30数年にわたり定年前にサラリーマンを辞めるまで付き合っていました。私がい会社は入社5年目には必ず転勤させる社内規定があり、もう5年以上も前になりますが、その時期に、50歳の父親を亡くした元上司のMさんから休みの日曜に自宅に電話があり、今度転勤の話があるが、関東筑波にある最新鋭工場の資材課と大阪の堺にある事業本部の本社工場の購買部とどちらが良いか、内々に私の希望を聞きたいとのことであった。転勤の覚悟はしていましたが、新入社員以来5年間、本社の資材部でこの上司の下、ホットな職場の人間関係で、ぬくぬくと仕事より、社内の人との遊びの方を忙しくしていたので、この人達と離れるのかと思うと、どちらの工場も、仕事

が忙しそうで、職場も厳しそうなので、工場以外はありませんかと自己本位で誠に勝手な質問をしたら、この上司は一瞬戸惑って少し間を置いて、何時もの冷静さを取り戻して、A君には、資材マンとして工場現場の経験を積んで、成長して貰いたいのので特に二箇所を選んだ。筑波工場は板金プレス部品の調達などで中小企業相手の細かい仕事が多いらしい。本社工場は電装部品、タイヤなどのメーカー部品の購買で相手は大メーカーが中心で、海外

からの部品の調達もこれから力を入れていくらしいので、特にこの仕事はA君が本社で設備を直接海外から調達していた経験と貿易知識が生かせると思うのやけれどー、とその他に選択肢はない、出来れば本社工場に行くのが良いことを匂わされた。私も初めての転勤で、全然知らない異境の関東ローム層の原野に足を踏み入れるより、まだ、土の色が同じで身近に山が見える大阪府下に居た方が水に合いそうだ、仕事も下請けの中小企業相手にコストダウンという値下げ交渉して自分が苦しむよりも、購買部で大メーカー相手に価格交渉する方がまだ精神衛生上ま

しな気がしたのと、Mさんの君の貿易知識が活かせると言う説得が私の自尊心を癒り、又事実、直接輸入を多少なり行つて、貿易業務を少しだけ身につけたことしか資材マンとして通用するものは無いに等しかったので、そこで、Mさんが薦められる方にお任せしますと返事をしたら、購買部長のO部長も良く知っているの、私の方から良く言っておくが、この話はまだ内々なので、社内の誰にも言わないようにと、最後に休みに電話して申し訳なかったと、Mさんからの電話は切れました。その電話があつてから1ヵ月後に正式に辞令が下りて堺市にある工場に転勤になりました。工場で配属されたのは

事前にMさんから聞かされていた購買部ではなく、プレス部品を購入する資材課でありましたが、サラリーマンとしては、この工場の所長(この工場だけが他工場より別格で製造所と呼んでいた)ので、トップは製造所長呼ばれて、身内だけのエリート意識を持っていた)から恭しく渡された配属辞令に本社から転勤してきた、いち平社員が聞いていた職場と違つたとその場でクレームをつける勇氣もなく、与えられた職場で下請け会社相手の慣れない仕事を連日夜の10時頃まで残業してこなしていました。回りの人も自分の仕事をこなすだけで精一杯で余裕が無く、直属の課長も仕事のトラブルの相談をしたところ、トラブルを上手く解決するのが君の仕事であるとしゃしゃと割り切つて突き放されたので、それ以来自分なりのやり方でやらざるを得なくなり、孤立していました。そこに、エンジンの外觀に錆が発生したと言う大クレームが輸出先で発生して、その賠償を数千万円要求してきている、その解決に付きエンジン輸出している社内貿易部門から説明に来るので、このエンジンのプレス部品を購入した担当の私がその問題の積明と賠償金の解決に当れということでした。部品を製造した下請けのT製缶工業、その部品を塗装したS工業に、錆発生

の原因と対策とクレームの賠償金につき検討して欲しいと責任者に連絡したところ、この二社共にAさんは本社から来て

「かなしみ」(続)

前号で、「かなしみ」というテーマの竹内整一のエッセイを引きながら、山で遭難死した後輩の母親の「かなしみ」について考えてみた。

竹内は、乾いた現代社会に必要なのは「かなしみ」という情感であることを強調して、「かなしむな」ではなく、きちんと「かなしめ」という。

本居宣長がこんなことを説いているそうである。死ぬということはわれわれにはどうにもならない「かなしい」出来事なのだから、われわれはその「かなしみ」をひたすら悲しめばいいのだ、そうすることに於いて、この世をこの世たらしめている大きな働きに従うことが可能になり、そこに根本的安心がえられてくる、と。

それで竹内は、きちんと「かなしめ」というのだが、そういう放つだけではちよつと無責任じゃないかと僕は思うのだ。きちんと「かなしむ」とはどういうことなのか、大きな働きに従うにはただ「かなしむ」だけでいいのか、現代人はきちんと「かなしんで」いないともいうのか。

この世たらしめている大いなる働きにつながるためには物語が必要ではないかと前号で述べた。きちんと「かなしめば」、誰にでも物語がうみだされ

て大いなる働きにつながり、ほんとうに根本的安心をえられるのだろうか。

後輩の母親はきちんと「かなしんだ」にちがいない。そして「かなしみ」に押しつぶされるように亡くなったと僕は思っているのだが、もしほんとうにそうならば、彼女は大きい働きと結びあうことなく、根本的安心もえられず亡くなってしまったことになる。

週に一度、お袋の健康状態を看に看護婦がやってくる。彼女は数年前、脳腫瘍で四歳になったばかりの娘を亡くした。あと半年の命と診断されたとき、信じなかったそうさ。まわりからも助からないといわれたけど、自分は絶対助かると信じていたという。それゆえ、亡くなったときは絶望の淵に突き落とされたようで、「かなしくて、かなしくて」、ひと月ほどはお骨を抱いて泣いているばかりで、食べるものはのどを通らず、外に出ることもできなかつたという。あんなつらい思いは言葉なんかでいいあらわせない、けど誰かに聞いてほしいという気持ちもあつた、と涙を浮かべて語つたことがある。

彼女もまた、きちんと「かなしんだ」にちがいない。そして根本的安心がえられたのだろうか。彼女の場合、よくある話かもしれないが、生まれ変わりの物語をつむいで、癒されていったよ

うだ。話を聞いていると、ほんとうに生まれ変わりを信じて疑っていない。来世でふたたび亡くした子を胎内に宿すんだと信じて疑っていない。だから、長生きしたいなんて思わないそうさ。彼女は、娘の死をどうにか乗りこえて、宣長のいう、この世たらしめている大きな働きとつながって、根本的安心を得たのだろうかという、どうもそうでもないらしい。

彼女はよくしゃべるし、よく笑うし、ひじょうに明るい。以前より前向きで明るくなったと友だちからいわれるそうさ。本人も、娘を亡くしてから二人の子に恵まれ、いまはほんとうに幸せに感じている、だけど、いつも不安なのだという。あんなつらいことを乗りこえたんだから、どんなことにもたえられそうさというのだけれど、たえず漠然と不安が自分をおおっていて、ぬぐいえないらしい。

彼女は職業柄、死後処置をすることがあつて、この間、自宅で亡くなったおばあちゃんの遺体をきれいに拭いて、身じまいを整えたことがあつたという。そのときは何もなかったのだけど、仕事を終えてナース・センタ―に帰る途中、突然身体が震え、涙があふれてきたそうさ。自分でもわけわからなくて、どういうふうに帰ったかよく覚えていないという。どうも、遺体に

ふれたとき、同じように息を引き取つたばかりの娘の身体を拭いたときの、その独特の感触が全身にのみがえつたらしい。

幼い子を亡くすつらさというのは、僕なんかの想像を超えている。ひたすら聞くだけだ。

彼女は産科に勤めていたとき、流産して落ち込んだ女性に自分の経験を話したという。退院するとき、晴れ晴れと元気を取り戻したその女性に感謝されたそうだが、子を亡くしたふたりの心が、彼女の話によつて共鳴したのだろう。彼女は、自分と同じ境遇に置かれた人と、もつとたくさん話をしたいという。

宣長は、「かなしみ」に耐えがたいとき、必ずそれを言葉に表すものであり、そのように表現することによつて、さらにそれを人に聞かせ、共感してもらふことによつて、こよなく慰められてくるし、気も晴れてくるのだ、と説いているそうさ。ただ、聞いてくれる人、共感してくれる人というのは、誰でもいいというわけではないだろう。

彼女が同じように子を亡くした人と話をしたいというのは、自分が味わつた「かなしみ」を言葉にあらわして共感してもらうだけではなく、聞き手になって相手の表現する「かなしみ」を共感したいということだと思ふ。(猿)

まだ何も我々の仕事は分っていない、それに海外で起きた問題に対して損害賠償せよと言うのは、我々の会社を潰すぞと言うのと同じや。一方的にクレームのしわ寄せをこちらに持つてくるのは、今までのお宅のやり方やけど、今度は金額が大きいので承服しかねる、と却って逆切れされて、取り付く島もなく電話を切られた。仕方なく、何のクレームに対する手がかりも掴めず、身ひとつで会議に臨んだ。大体、工場この様な部品に起因したクレーム会議は検査課が裁判官になり、原告は被害者？の客先の代弁者である営業がなり（今回は輸出部）、被告はいつも被害を発生させた部品を購入した資材課という役割が決まっており、常に弱い立場で油を絞られるのは被告の資材課と決まっています。会議はまず、原告から被告への罪状認否で始まり、今回このクレームでタイ国の重要な客先が大変な迷惑を被っているの、早く責任を持って問題の解決を図り、損害賠償金は日本円で約2千万円程になるので支払ってもらいたいと原告の輸出部員のTさんから強い口調で、この場で結論を出すように要求された。裁判官の検査課は私に今回の罪状の認否を求め、認めるならば関係協力会社2社より其々1千万円のクレーム賠償金を要求せよというものであった。

この二人の割り切ったあたかもお前が犯人であるとする発言に頭に血が上った私は、口から出任せにまず、錆発生の原因の特定には時間がかかる、製造元としての品質は検査課が行いこれ認めたことで協力会社に全責任を取らせることは契約上無理がある。錆は本船海上輸送上のオンデッキで発生する可能性があるし、タイは今は雨季で倉庫内、況してや野外保管であれば、錆は発生しやすい。今までにこういう問題が発生したことはなく、今回初めて発生したことは、何か現地側に問題がある可能性があるの、今後の為にもTさんの輸出部の方でも調べて欲しい。又、問題が問題なだけ取り急ぎ、シッパーのM商社に対し保険会社に対してクレーム・ノウテイスを出させて下さいと発言した。輸出部員のTさんは、この出任せの反論発言に驚き（今までも工場は輸出部の言う事は無理難題でも聞いてため）況してや工場の一資材部員が貿易の流れを理解し、専門用語まで知っている奴がいるとは思わなかったようで、分りました、A君が言うように対応します。と言うことで原告への反論が通じてこの会議は5分ほどで終わりになりました。Tさんは倒産した大手商社A産業から移ってきた人で、私の発言内容は当然元商社マンとして理解し、直ぐにM商社に対し

アクションを起こした様でした。その後、この話は何も無かったように過ぎましたが、下請け会社の2社は気が気ではなく、どうなったかの説明を求めてきましたので、直接このTさんに電話して説明を求めたところ、君の言う通り、結局M商社経由で保険会社に求償したら、それが認められクレーム費用全額2千万円が支払われたわー、工場の実損は無しで済んだので良かったなあ。この情報は工場の検査課には既に連絡したが、聞いていないのかー、と言うことで、この問題が下請け会社に累を及ぼさずに済ませたことにはほっとしました。それに新入社員当時から唯一勉強したと言える輸入業務の貿易知識が転勤先と思われる購買部ではなく、全然、本来業務では使わない資材課で役に立つこととは、何でも知ると知らないとは大きな差が出てくる、何事も経験と知識とそれを生かす知恵であると身をもって体験しました。この出来事が関係した下請け2社から隣の課にいたこの夏亡くなつたUさんが聞き、本社から転勤したての資材マンがベテランの輸出部員を言い負かせたと言う事（何でも話しは大きいのが面白いもので）で自分の上司には余り褒めてもらえなかったが、何よりもいつも弱い立場にある下請け業に累を及ぼせず解決した

ことをこのUさんは“Aさんよー有難う、ようやってくれた”と自分の事のよう喜んで、私のやり方を物事の道理として資材マンとして正しいやり方をしたと、又、横で聞いていたが何も助言出来なくて申し訳なかった、と頭を下げて自分に関係ないのに、礼まで言つて貰った。この工場にこんな仕事に対して熱い姿勢を持つて物事を観察している人もいるのかと、その時以来、このUさんと仲良くなり、仕事の悩みなどを聞いてもらったり、関東地方の取引先まで一緒に出張したりして、仕事の帰りに堺東で飲みながら今の資材部門のあるべき姿などを議論しましたが、程なく私が二年も経たずに、今度はTさんが所属する輸出部に転勤となり、このUさんがいる工場を離れてしまいましたが、この時ほどもつと工場の資材の仕事はUさんと共に仕事をしつて極めたいなあと思つて、輸出部への転勤が納得出来なかつたことをUさんに話をした私の29歳の自分を昨日の事のように思い出し、今年はその身の振り方が大変であったが、もつとUさんに会つて話をしてあげばと連絡をしなかつた事を今更ながら悔やんでいます。

Uさんの“よう、Aさんよ。阪神、来年はきつと優勝やで！”というかすれ声が天国から聞こえて来そうです。

心と体

—ある医院の先生の話。

交通事故には加害者と被害者があって、両方に言い分があるのだが、けがをした患者さんの中には加害者の悪口ばかりまくし立てる人がいるという。そういう人の傷は往々にして治りが遅いそうだ。

怪我に限らず医院にくる人は、誰もが「治りたい」と願っているのだが、そう思いながらも知らず知らずのうちに、病気を自分の方からつかんで離さず、それに気がついていない場合が案外と多いとのこと。自分が病気にしがみついているのだということがわからない。自分がかんではいる手を離さなければ、いつまでたっても、治りたいけれど治らないのだという。

病気になっても、いつかは必ず健康になると信じ、つまらない過去の事は忘れ、生かされている事に感謝し、自分の体をいたわること。笑う機会、よろこぶ機会にめぐり会えば、素直に受けいれて、笑い、よろこんで、日々を過ごす。そういう余生を送ることが大事だという。

心と身体というものは、平素私達が考えている以上に深いつながりがあるようである。

忙中閑あり

一年を振り返ると社会の出来事はともかく自分の生活の中にも、いろいろな事が起きては過ぎてゆきました。どんどん流れ去る歲月の中でちよつとした事に喜憂しているのが人生です。黄葉の銀杏も紅葉のみみじも、その葉を落とし冬仕度を始めました。身から出た錆なのかあちこち体の故障が気になります。

今年も残り少なくなりました。忙しい、いそがしいといいながらも本だけは読むのです。一冊の本を読むことで作者の世界に入り込み現実を離れ、時間を飛び越え、経験したことのないうようなことを教えてくれます。

仕事といえるような事もしていないので少し悪びれもするのです。

今や私達の時間はテレビに吸い取られ、テレビが付いていないとその静けさに不安を覚えることもありですが、テレビを消してみると、さて、何をしようと思つたのか、やつと自分の時間が戻ってきて静かに自分の足で歩いているように感じるのです。一人になってみて。

厄除・開運・願旗奉納

今年もいろんな最後の祈願が近づ

きました。景気の低迷で今年はやまり良い年でもなかつたが、悪い時にこそ気持ち明るくもつて少しでも良い面を見つめてゆきたいもの。良いことも悪いことも順番にめぐり廻るのが自然だろうと思うようにしている。今年も残る月日も少なくなつて無事に元気で送れることをねがっている。

年末になると翌一年間の無事息災を願う為の厄除開運の願旗を奉納することにしているのです。早目に日時まで指定して電話を入れたことをすっかり忘れて、自分の都合のよい日に訪問したら、住職につこり笑つて「きれいに忘れはつたんですか、日時まで指定しておきながら」と、皮肉とも何ともいえない笑顔には、すっかり降参。イヤハヤ、失礼しました。奉納料、紅白のぼり、家族名、封筒渡しして早々に退散となつた次第。こんな事で大丈夫かなあ。

編集後記

早いものでもう師走です。今号で最終回をむかえる連載「江戸っ子エンちゃん」を、三年にわたつて投稿して頂いた尾崎さんに感謝します。有り難うございました。これまでの記事をまとめて『百日紅』という本を出版されます。是非皆さん読んでみてください。激動の昭和を懸命に生きた女の生きざまが伝わってきます。

毎回、これでもいいのかと自問しながら続けてきましたが、何とか年を越えられそうです。先行きの不安を希望や夢に変え少しでも面白さを感じてもらえるような紙面を作りたいものです。今年も一年間お読みいただきありがとうございました。(嘉)



1月5日(火)から

☆お年玉セール☆

本皮ブックカバー☆

¥2000

数に限りがあります

冬物商品30%off

年末年始のお休みのご案内

12月29日(火)~

1月4日(月)

お休みさせていただきます

☆☆☆

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~